

山田寺第3次発掘調査現地説明会資料

1979年7月21日 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

奈良県桜井市大字山田にある山田寺跡は蘇我倉山田石川麻呂の発願により7世紀中葉から後半にかけて建立された寺院である。奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、昭和51年度より発掘調査を継続的に行ってきた。昭和51年に行った第1次調査では、塔の規模を明らかにするとともに中門、西面回廊の位置をつかむ手がかりを得た。第2次調査は昭和53年に行い、金堂及び北面回廊の実態を明らかにした。また、両次の調査を通じて、山田寺の伽藍配置は従来言われているような四天王寺式伽藍配置ではなく、回廊は塔・金堂のみをとり囲む形式であることが明らかになった。以上の調査結果をふまえながら、講堂跡と北面回廊跡の検出を主目的として第3次調査を昭和54年5月11日より行っている。なお今回の調査面積は約1300㎡である。以下これまでの調査結果についてその概要を述べる。

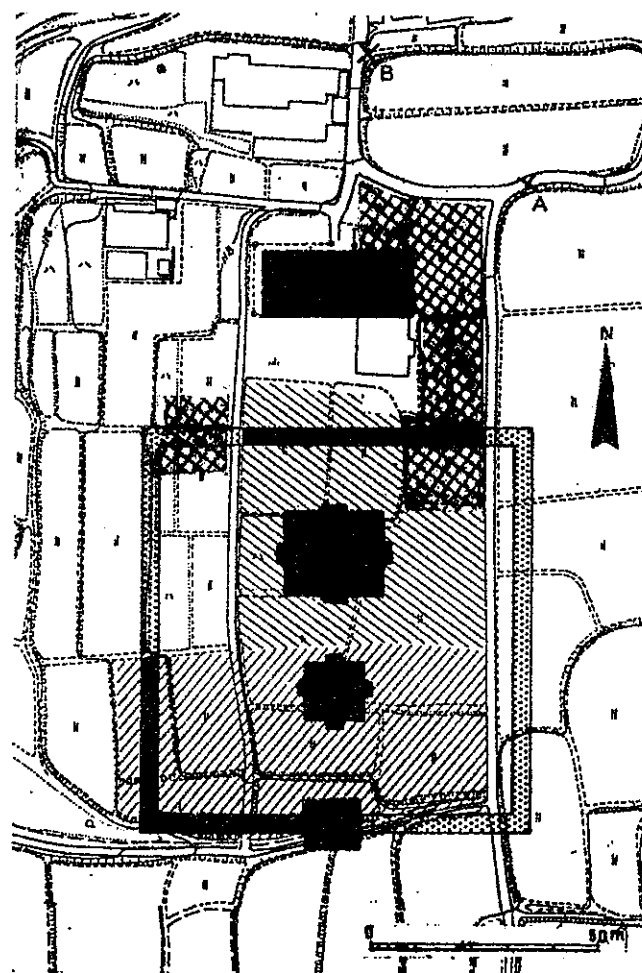
講堂 金堂の北約61mにあり、基壇の西半部は現境内地内に礎石や地覆石が良好な状態で残っている。今回の調査部分は講堂の東半部にあたり、境内より一段低い水田となっているところである。調査の結果、礎石はすべてなくなっていたが、礎石抜取跡5ヶ所と基壇の地覆石抜取跡2ヶ所を確認した。検出した礎石抜取跡と西半部に現存する礎石からみて、講堂は桁行8間(111尺)、梁行4間(48尺)の規模となり、講堂の中心は伽藍中軸線上にある。地覆石の抜取跡は、基壇東辺で検出した。花崗岩からなり、塔・金堂と同様に壇上積基壇と推定される。また、基壇高は旧地表面から約80cmとなる。さきの1・2次調査では塔・金堂の周辺には奈良時代になって瓦敷、平安時代になってパラス敷で整備されていたが、講堂周辺にはそれらの痕跡は認められなかった。

北面回廊 第2次調査で明らかになった部分に東接して3間分を検出しており、伽藍中軸線から東へ8間分を検出したことになる。今回の調査地ではいずれも礎石が現位置を保って残っていた。梁行1間の単廊で、桁行・梁行とも柱間は12.5尺(3.78m)となる。基壇は地山を削り出してつくり、大形の花崗岩玉石を用いた乱石積としている。基壇幅21尺(6.3m)、高さ45cmである。

礎石列のうち南側のものは一辺約0.7mの方座の上に直径0.45mの円柱座を造り出

し、北側のものはさらに円柱座の両端に地覆座を造出している。このことから北側は壁仕切りであったことがわかる。さらに注目すべきは、礎石のいずれにも単弁12弁の蓮華座が彫り出されていることである。蓮華座を伴う礎石は金堂でも明らかになっており、回廊のものはそれを小型化したタイプである。雨落溝は南側にあり、花崗岩玉石を側石に用いた幅55cm前後、深さ20cmの規模である。また、北側礎石列のほぼ中間位置に掘立柱の掘形(SX079)を検出しているが、その性格については回廊造営時の足場穴あるいは仮設的な塀とも考えられよう。

その他の遺構 回廊で囲まれた部分では、第1・2次調査と同様に瓦敷・パラス敷がみられた。回廊の北側では数箇所土城があるが、SK01、SK04を除いていずれ

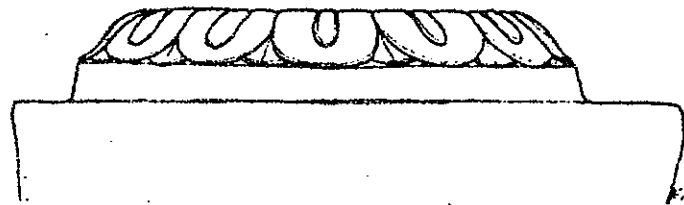
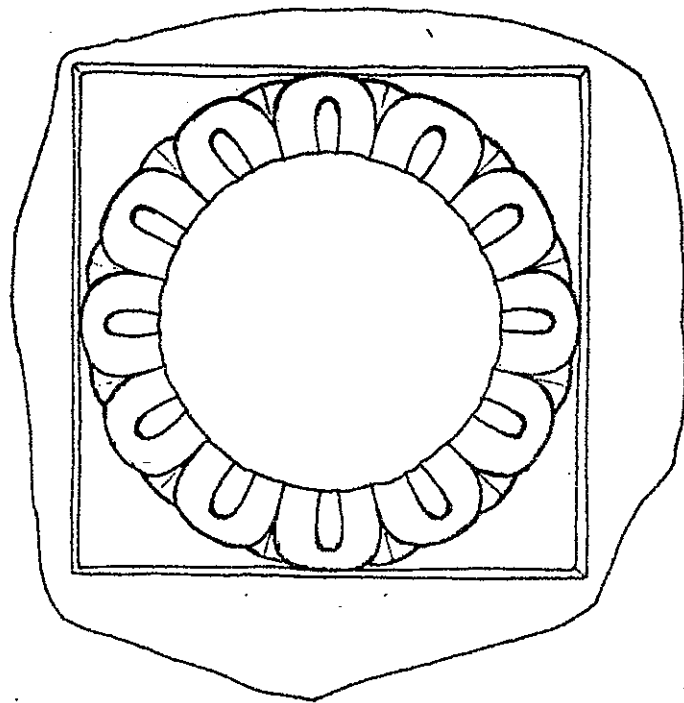


も11世紀以降のものである。

遺物 瓦罎類、埴仏、土器、金銅製品、鉄製品がある。さきの第1・2次の調査に較べて遺物の出土量は少ない。埴仏は講堂の周辺では全く出土しておらず、講堂には埴仏が用いられなかったものと思われる。金銅製品のなかには、は容器の蓋のつまみと考えられるものが12世紀の土器とともに出土した。瓦はいわゆる山田寺式が大半で、1・2次調査で出土したものと大差ない。土器では二彩・緑釉・灰釉陶器のほか、須恵器・土師器・黒色土器・瓦器がある。

まとめ 講堂の規模については、諸書録起集に「5間4面(7間4間)」とあり、その後も7間説と8間説があっ

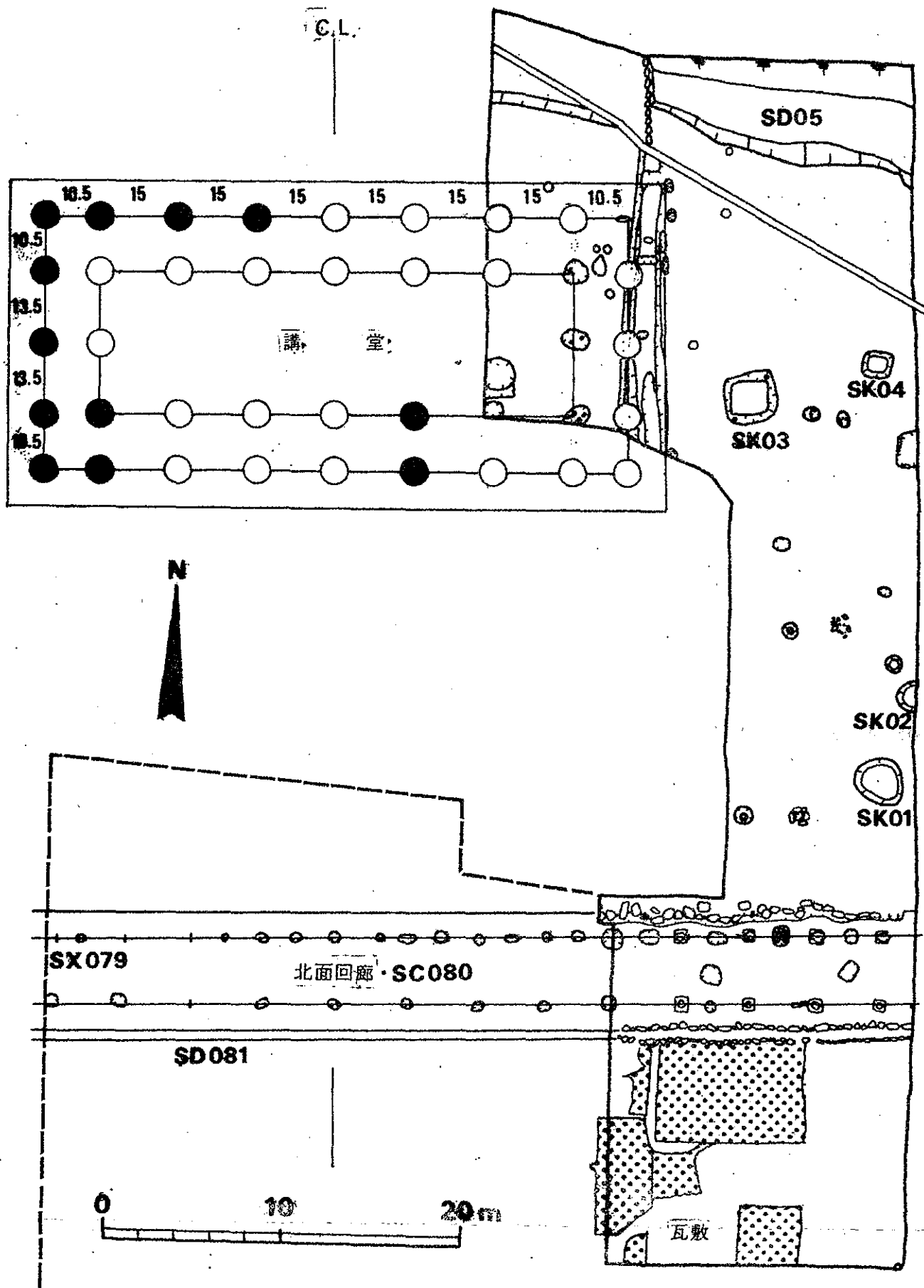
た。しかし、今回の調査によ
 って講堂は飛鳥寺、法隆寺、
 四天王寺と同様に8間4間
 あることを確認した。また、
 回廊礎石には金堂の礎石と同
 様に蓮華座を伴うことが明ら
 がになった。わが国の古代寺
 院において礎石に蓮華座を伴
 う例は知られておらず、きわ
 めて特異なものと考えられる。
 また、礎石の蓮華座からみる
 と、回廊の造営年代は皇極朝
 に建立された金堂とそれほど
 へだたりのないものと思われ
 る。講堂の建立年代を出土遺
 物からとらえることはできな
 かった。しかし、講堂本尊の
 丈六仏の開眼供養が天武14年
 (685)に行われているところ
 をみると、講堂もそのころに
 は完成していたものであろう。なお細部にわたっては調査の終了をまって今後
 検当してゆきたい。



回廊礎石模式図 (十分之一)

山田寺略年表

641 (舒明13)	平地を始める
643 (皇極 2)	金堂を建てる
648 (大化 4)	初めて僧が住む
649 (大化 5)	蘇我倉山田石川麻呂害に遇う
663 (天智 2)	塔を構える
673 (天武 2)	塔の心柱を立てる
676 (天武 5)	塔露盤を上げる
678 (天武 7)	丈六仏を鑄る
685 (天武14)	仏眼を点ず
699 (文武 3)	封戸300戸を施入
703 (大宝 3)	文武天皇、四大寺及び山田寺、四天王寺に齋を設ける
1023 (治安 3)	藤原道長、山田寺に立ちより堂塔を見る
1034 (長元 7)	検校善妙、石川麻呂の忌日に初めて法華八講を修す
1187 (文治 3)	興福寺の僧、山田寺の薬師三尊像を強奪する
鎌倉時代	多武峰の末寺となる
室町時代	興福寺の末寺となる



山田寺跡第3次発掘調査遺構配置図